

Title	巢守巻の新資料 : 伝六条有純筆源氏物語古系図切の紹介
Author(s)	伊井, 春樹
Citation	大阪大学古代・中世文学研究会会報. 1985, 1, p. 2-4
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/67225">https://doi.org/10.18910/67225</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 巢守寸卷の新新次貝料

一伝六条有純筆源氏物語古系図切の紹介一

院政期から鎌倉期にかけて、今日一般に読まれる五十四帖の「源氏物語」とは系列を異にする巢守卷が存したことは、つとに池田龜鑑博士の「源氏物語古系図」の整理によって明らかにされた。その資料から、かつて存在した巢守物語が想定され（「源氏物語大成」巻七・研究資料篇）、さらに発展して稲賀敬二氏は現宇治十帖の成立に大きく関与していることを論じられた（「源氏物語の研究」）。これに

ついで中野幸一氏はすぐさま反論し、むしろ宇治十帖を模した後の物語と位置づけられる（「物語文学論攷」）。その後賛否両論が示されたが、今のところ常磐井和子氏の詳細な分析によって、巢守物語は「源氏物語」第三部の物語の種々の要素を取り入れて、後に成立した（「源氏物語古系図の研究」）とする考えに落ち着いているかと思われる。ここではこの論争に深入りするのを避け、これま

伊井 春樹

で知られていなかった巢守巻に関する資料の古筆断簡を紹介するにとどめる。それは古筆手鑑「花月」に押された一葉で、筆者を六条有純卿とする。

—— 螢兵部卿親王 ——	
母不詳	源三位
もとは帥宮と	母前齋院
きこへきおとめの	むめか枝の巻
巻に朱雀院に	に侍従すもり
行幸の時兵部	の巻に三位
卿に任すうせ給	兵部卿監おなし
けるよし紅葉	きまきにかく
	れ給ひはめて

正嘉本古系図によると、螢兵部卿宮には侍従・童孫王・宮御方・源三位の四人の子供が記される。現存の物語には、初めの三人までが登場し、源三位は見いだせない。巢守巻にいたって、源三位が初めて紹介されるのであろう。さて、その源三位には、藤中納言(藤大納言とも)との間に頭中將・巢守三位・中君の三人の子供がいたようである。この姉君の巢守三位が、匂宮と薫との関係を持ち、最後は大内山に隠れるヒロインとして登場するわけで、宇治十帖における浮舟の運命を思わせる。

父親の源三位について、正嘉本古系図では「父宮の御つたへにて琵琶めでたくひき給ふ、もとの上にくれて後、ともしくしてすぐし給ふ、いまの上はもとの上はらからなり、故輔中納言のもとの上」と説明する。父の螢宮の琵琶を伝えて、名手として知られていたようである。この手が、後に巢守三位に

相伝されるにいたるのであろう。「源氏系図小鑑」によると、この源三位は「梅がえの春の比、六条院よりもちゝ宮のつかひにて巻物とりに出たまふ」人物という。右に示した伝有純筆切も、源三位は梅枝巻の侍従であったことを記す。

梅枝巻で、螢兵部卿宮が明石姫君に本を贈る場面、「さまざまのつき紙の本ども選り出でさせ給へるつるでに、御この侍従して宮にさぶらふ本どもとりにつかはす(大成本九八八頁)」として一度だけ見える侍従が、巢守巻での源三位だとするのである。この人物が、本断簡によると「母前齋宮」とする。螢兵部卿宮は、右大臣の娘と花宴巻以前には結婚していたはずだが、源氏三十三歳の少女巻の頃には亡くなっている。十三、四年の結婚生活であろうか。その後若菜上巻で真木柱と結婚し、宮御方が生まれている。知られる北の方は、この二人だけである。

螢兵部卿宮の子供のうち、現存本に見える侍従・童孫王・宮御方の三人のうち、初めの二人は母親が明らかではないが、可能性としては右大臣女であろう。ところがこの古系図では、源三位と同一人物とし、母を前齋院だとする。すると正嘉本のように螢兵部卿宮の子供は四人ではなく、三人であったことになる。彼はまた別の女性と結婚し、侍従が生まれていたと知られる。それではこの前齋院は、誰であろうか。螢宮と結婚可能な年齢の前齋院は、桐壺帝の御代の齋院と、朱雀院の即位にともなって卜定した桐壺帝皇女の女三宮の二人となる。後者は腹違いの姉弟であるため結婚できないとなると、前者しかいなくなる。螢宮は光源氏の弟だが、右大臣

女との結婚などから考えると、それほど年齢が違っていたようにはおもわれぬ。一方の齋院は、桐壺の即位で卜定したとなると、当時幼い少女であったにしても、明らかに蛸宮よりは年上である。末摘花の女房侍従の君が、その前齋院のもとにも仕えていたという。

わずかに一枚の断簡で、書かれた内容もわずかだが、物語には記されなかつた背景が想像されてくる。なお、ほかにつれは、東山御文庫蔵「豪海」にも一葉見いだす。伝称筆者の六条有純は、江戸初期の公卿である。

(本学文学部)